



TITLE:

フィリピンの農村工業における持続性：アンティーケ州バリ村の土器産業

AUTHOR(S):

永井, 博子

CITATION:

永井, 博子. フィリピンの農村工業における持続性：アンティーケ州バリ村の土器産業. 東南アジア研究 2000, 38(2): 185-202

ISSUE DATE:

2000-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56751>

RIGHT:

フィリピンの農村工業における持続性

——アンティーケ州バリ村の土器産業——

永 井 博 子*

The Continuity of a Village Industry in a Philippine Community: The Pottery of Bari, Antique Province

Hiroko NAGAI*

This research note aims to explore the existence of a traditional village industry in a Philippine community. The village of Bari is known for its pottery within the Province of Antique. It has been producing traditional wares such as water jars, cooking stoves and plant pots for local consumption. The first attempt to develop the pottery of Bari with a new kiln took place in the 1950s. With the Philippine government's policy to promote ceramic industries for export since the 1980s, the Department of Trade and Industry planned and implemented several projects such as forming an association of potters, providing loans, and introduction new technology. Despite these efforts, the pottery of Bari has shown no sign of expansion or growth. It has maintained its traditional structure up to the present.

In Bari, pottery has been manufactured by the wives of small farmers and agricultural workers who live at the subsistence level. The need to secure a rice supply as well as cash income determines the division of labor in the household: the husband farms rice and the wife makes pottery. Their primary goal in making pottery is to meet the basic needs of the household and provide education for their children. Development projects, which endeavored only to improve the manufacturing process, were not appropriate to this socioeconomic situation of the potters. They have not only persisted in their traditional way, however, but also responded as independent artisans to trends in the local market. For instance, products such as charcoal cooking stoves which carry the name of a brand of propane gas, and a new type of plant pot called "bunsay" indicate the sign of change. It appears that such innovations have been able to sustain this village industry.

は じ め に

本稿は、フィリピンの伝統的農村工業がどのような形で農村社会の中に存在し、どのような持続と変化の過程をたどっているのかを明らかにするために、フィリピン中部ビサヤ地方のアンティーケ州バリ村における土器産業を事例として取り上げ、具体的に記述することを目的とする。

* School of Social Sciences, Ateneo de Manila University, P. O. Box 154, Manila, Philippines

フィリピンの民族誌的研究では、クリスチャン・フィリピノ社会における伝統的農村工業が注目されることは、近年までほとんどなかったといつてよい。しかし、農村工業は地域住民に必需品を提供し、また地域間交易にもその製品を供するという形で、農村経済では常に重要な一角を占めていたのである。そして、農業革新および農村構造の変容と並行して、農村工業も近代化の波をかぶってきた。工場生産品の代替物の流入によって、伝統的製品の需要が激減し産業自体が消滅してしまったケースもあるが、他方、第二次世界大戦後のマカパガル政権以降、農村工業は地域社会の経済開発計画に関連して注目され、輸出向け製品生産が奨励されるに至り振興開発が提唱されてきた。農村工業における近代化では、仲買人など特定個人や法人が産業支配を行い、生産者が単なる下請けとなり、あるいは賃労働者化するという経緯が顕著であった。しかし、そのような産業構造上の変化を経験することなく、地域社会における従来の役割の内に存続する農村工業も多く存在している。筆者の関心は、この消滅も拡大もせず存続する農村工業の持続性にある。

フィリピン中部のビサヤ地方最西端に位置するアンティーケ州は、フィリピンの中でも低開発地域として知られてきた。他州から海と山脈で切り離された不利な地理的条件にあることと、州内に産業を発展させるような資源がないことが、その後進性¹⁾の原因として挙げられる。アンティーケ州で生産される素焼陶器（土器）は、植木鉢や焔^{こんろ}鍋など日用雑器が主で、形態的にはフィリピン各地で見られる赤茶色の伝統的陶器と共通しているといつてよい。¹⁾ アンティーケ州では、州都サンホセ・ブエナビスタから4キロほど離れたシバロム町バリ村がその製造地として知られている。バリ村の土器産業は、1950年代から直接的・間接的にいくつかの開発援助計画の対象となってきた。ところが、それらの計画はすべて不成功に終り、産業は特に発展することも、また解体することもなく、現在においても伝統的な方法で生産が行われている。

バリ村の陶工たちは、母や祖母の世代、またそれ以前から同じやり方で土器を作ってきたと語る。では、その持続性は何を基盤としているのであろうか。また、そもそも土器産業はバリ村の村落社会にどのように位置づけられてきたのか。そして、なぜ開発計画は成果を上げることができなかったのであろうか。開発計画の成否分析は本稿の直接の目的ではないが、開発計画に対する生産当事者の見方を通して、この農村工業における持続性と将来の在り方を探るものである。

1) 本稿では、陶土を成形し釉薬を塗って焼いた器を「陶器」、素焼きのものを「土器」とし、両者を含める場合は「陶器」とする。ただし、製造者に関しては「土師」という用語は採らず、より平明な「陶工」を採用した。

2) 傾斜度18%以上の土地を upland とするのが一般的であるが、アンティーケ州政府の資料には8%を境界とし、約8割を山地部としているものが多い。

I 背 景

アンティーケ州は第6広域行政地区である西ビサヤに属する。パナイ島の西岸に位置し、その東に延びる中央パナイ山脈によって隣州から隔離されている。南北に155キロ、東西に35キロと細長く、総面積は2,522平方キロメートルで、国土面積の0.84%に当たる。20世紀初頭には人口密度の比較的高い地域であったが、戦後は一貫して人口流出地域となり、1995年現在で人口は431,713人である [Philippines, NSCB 1998]。アンティーケ州の産業は主に州内消費向けの農業・漁業で、労働人口の約6割が第1次産業部門にある。しかし、農業人口が多い一方、土地面積の約7割が山地部とされ、水稻栽培に適する平地は海沿いや主要河川の河口部に見られる程度である。²⁾ アンティーケ州の土地所有形態の特徴は、農民の多くが3ヘクタール以下の耕地を持つ自作農であることで、小作農の耕地面積は総耕地面積の33%である [Philippines, NSO 1996]。³⁾ 土地を持たずに余剰労働力となった農民は、農業労働者または建設現場などにおける日雇いの非熟練労働者に転ずるか、あるいは出稼ぎ労働者となって都市部との循環を続けている [永井 1997]。

バリ村が属するシバロム町は、州内で最も広大な平地農地と灌漑設備を持つ地区である。町内を横切って流れるシバロム川が肥沃な土壌と豊富な水をもたらし、水稻栽培には最も適した土地となっている。しかし、町の中心地から2キロの位置にあるバリ村は、シバロム川に沿ったこんもりとした丘を村域とし、その約75%が傾斜度の高い山地部である。村の家々は、丘の稜線を通る村道に沿って列状に集落を形成している。シバロム町の資料によれば、バリ村の人口は1995年で744人、全世帯数の約55%が農業を主収入源としており、年収では、全国農村部最低賃金による年収30,000ペソのラインを下回る世帯は全世帯数の約45%に当たっている。⁴⁾

バリ村の土器産業に関しては、シーンズによる1968年の調査が唯一のまとまった記録であり、それ以前の様子を示す史料は残っていない。シーンズによれば、当時バリ村には52人の陶工が存在し、州内の土器産業のうちでは陶工数および生産量において最大であった [Scheans 1977: 33]。1987年で38人（バリ土器製造組合員のみ）、1999年では36人（32世帯）で全世帯の28%が土器製造に従事している。陶工のほとんどが女性である。

3) アンティーケ州共通語のキナライア語では、分益小作農はアグサ、定額借地農はアリエンドと呼ばれる。フィリピンの稲作農業では、地主と小作農が一定比率で収穫と費用を折半する分益小作が一般的であったが、まずマカパガル政権における「農地改革法」（1963年）で小作農の定額借地農化が提唱され、マルコス政権の「小作農解放令」（1972年）においても、従来の分益小作農制度の改革が稲作農業技術改革とともに推進された。しかし、実際には一部の地域を除いて定額借地農化は進まず、アンティーケ州では1991年現在で、小作農地面積は総農地面積の25%であるのに対して、借地農地面積は8%である。本稿では「小作農」にこの双方を含めることとする。

4) 法定最低賃金は、首都区域外の農村部で1日につき95.50ペソから200ペソで、各広域行政区域で額が決定される（2000年現在）。ただし、年収に対して1カ月分収入の上乗せが義務づけられているので、32,279ペソが最低賃金による年収となる。

II バリ村における土器産業の実態

1. 製品の種類

バリ村における現在の主要な土器製品は、①カラン（調理用薪焔炉）、②シイレンまたはウリガン（調理用木炭焔炉）、③バガ（水瓶）、④クロン（土鍋）、⑤カルデロ（取手付鍋）⑥パラヨック（平鍋）、⑦フラワーポット（植木鉢）、⑧ハンギン（蘭用吊り鉢）、⑨ブンサイ（平型植木鉢）、⑩ハロン（壺あるいは大型花瓶）、⑪ブドダン（養鶏用餌皿）の11品目である（表1参照）。

バリ土器は浸透性の高いテラコッタで、水瓶や植木鉢に最適である。特に水瓶は、その土肌に浸透した水分が蒸発する際に内部の水を冷却する機能があり、水道設備および冷蔵設備の普及していないアンティーク州の農村部では重要な台所用品である。しかし、もっとも需要が高いのは調理用焔炉である。バリ村や州都周辺では、下宿学生が自炊を始める5、6月になると焔炉の売れ行きは生産が追いつかないほどとなり、また、薪が湿る雨期には薪焔炉よりも木炭焔炉がよく売れる。植木鉢の需要も高く、バリ村では縁に様々な装飾を施した鉢が作られている。ブンサイは「盆栽」から来たことばで、フィリピンでいう盆栽とは数種類の植物を組み合わせ平鉢に植え込んだものを指しており、その平鉢をブンサイと呼んでいる。これらの主要品目以外では、ミニチュアの調理用具セットや大型蒸器、庭用金魚鉢などが作られており、こうした品は個人の特別注文によるものである。

表1 バリ村における主要土器製品

名 称	用 途	成形技法	小売価格（ペソ）
カラン kalan	調理用薪焔炉	輪積み、叩き	20
シイレン sylen	調理用木炭焔炉	轆轤、輪積み、叩き	18
バガ banga	水瓶	轆轤、輪積み、叩き	80-150
クロン kuron	土鍋	轆轤、叩き	10
パラヨック palayok	平土鍋	轆轤、叩き	15
カルデロ kardoro	柄付き土鍋	轆轤、叩き	15
フラワーポット flower pot	植木鉢	轆轤	5-10
ハンギン hanging	蘭用吊下げ鉢	轆轤	20
ブンサイ bunsay	平型植木鉢	陶板	20以上
ハロン jaron	壺または大型花瓶	轆轤、輪積み、叩き	100以上
ブドダン budodan	養鶏用平皿	轆轤	5

出所：1999年6月の調査による。

2. 製造過程

粘土はバリ村内の水田から採取される。陶工たちはどの水田に良い胎土があるのかを知っており、水田の所有者も土器製造のためにその部分には稲を植えずにおく。水田の泥に胸まで浸かりながら掘り出さなければならないので、粘土採取は重労働である。粘土の代価は金銭ではなく土器製品で水田の所有者に支払われ、1回の採取に対して焔炉1、2個が相場となっている。この粘土に対して、粘度を調節するために砂が通常2対1の割合で混ぜられる。この砂は村のすぐ側を流れるシバロム川岸から無料で採取される。土と砂に加えてもう一つ必要なのは着色用の赤土である。この赤土は隣村ラカロンの山地部で産出する。土と砂は、まず足で捏ね、さらに手で不純物を取り除きながら約30分で仕上げられる。採取および捏ね作業は、陶工自身によって行われるのが普通であるが、夫やその他の世帯成員が手伝うというケースも数件見られる。賃金労働者を雇うのは例外的である。

バリ陶器の成形は主に叩きの技法で行われる。まず、粘土をほぼ同じ大きさの固まりに分けて轆轤ろくろの上におく。轆轤はギヒタンと呼ばれ、2枚に重ねられた円形の厚い木板でできており、手で回転させることができる。轆轤でおおよその形を作った後、次に濡れた布を右手で器の口に当てて回転させ、表面を滑らかにする。ここで、器を専用の糸で轆轤から切り離し、少し乾燥させる。そして、丸石を左手に持って器の内側に当て、外側を叩き板で叩いて仕上げる。

この成形工程も品目によって多少の相違がある。小・中型の植木鉢は轆轤だけで作られ、叩き技法は使用されない。土鍋の場合は底を丸くするので、植木鉢とは逆に叩き仕上げは不可欠である。水瓶や壺は2つ、あるいは特別に大型の場合は3つの部分に分けて形成する。まず、口と肩になる上部を轆轤で作し、下部は粘土紐を積み上げてから叩いて形成する。少し乾燥させてから上部と下部をつなげ、さらに叩いて仕上げをする。バリ土器製品の中では、水瓶と壺の成形がもっとも難しく経験と練習を必要とするものとされている。ブンサイ鉢は、他の製品とはまったく異なる技法で作られる。まず、粘土で底板を作り、そこに板状の粘土を腰板として密着させる。ブンサイは長方形やハート形、星形など様々な形に作られるので轆轤は使用されないし、叩き仕上げも行われない。

形成が終わると、次に、赤土を水に溶いたものを布で表面に塗っていく。そして、さらに乾燥させた後、最後にブラロと呼ばれる特殊な石で表面を擦り、バリ土器独特のつやを出す。このブラロだけは近隣で採取することができず、母から娘へ、義母から嫁へ、あるいは親しい陶工同士で譲り渡されていくという。仲買人がどこからか持ってきてくれたという陶工もいる。

乾燥は、乾期には半日ほどですむが、雨期で雨が降り続けると数日が必要となる。専用の作業小屋を持っていない陶工の場合は、家中のスペースに器を置いて乾かすことになるので、生産数も限られることになる。

製品の製造出荷は1週間のサイクルで行われ、焼きは、通常、シバロム町の市日をひかえた

月曜日に行われる。焼く場所は、自宅の裏庭や道端など空いているところならどこでもよい。まず、等間隔に置いた小石や割れた土器のかけらなどの上に竹を渡して長方形の台を作る。この台の上に器をのせ、稲藁と乾燥させたバナナの葉を厚くかぶせて火をつける。自作農や小作農の世帯では、稲藁は自家の田からのものを使うことができるが、それ以外の世帯では、燃料は購入するのが普通である。藁は焼きの1回分が60ペソ、竹は6～10ペソで、毎週のことながら出荷前の手持ち金の乏しい時期に、この現金出費をつらく感じる陶工が多い。粘土代が金銭で計算すれば20～40ペソ、乗合オートバイによる運送賃が距離に応じて5～40ペソであるから、燃料費が最大の経費といってよい。土器は点火から数時間後には焼き上がり、長い木の棒で器を一つ一つ灰の中から取り出す。熱がとれてから、大型の四角い籠に緩衝材の藁とともに詰め、出荷を待つばかりとなる。

バリ村の陶工は、焼きの過程で器に多少のひびが入っても、セメントを詰め、赤土を塗り付けて修繕を施してから売りに出す。特に水瓶や壺の場合、製品自体がひび割れしやすい上に、粘土の量や労力も他の製品の比ではなく、単価も高いので、廃棄処分にはほとんどない。さらに、セメントは粘土よりも高価で耐久性のある素材であり、修理された器は機能上何の不都合もないと考えられている。

3. 製品取引と流通経路

バリ村の土器製品は4つの流通経路を通して、州内および州外の市場へと取引されていく。その第一は週市場での販売である。アンティーケ州には、町ごとに週1回立つ公設市場があり、バリ村の陶工36人の内、19人は自ら製品をその週市へ運び販売している。その中でも12人は火曜日のシバロム町市場で製品を販売し、7人は他の町市場を商い場としており、市場圏は州南部ほぼ全域に広がっている。製品の小売価格はどの市場でも相場が決まっており、大きな相違は見られない。

第二に、オーダーと呼ばれる特別注文による取引も頻繁に行われている。上記の主要品目以外の品は、個人の注文によって製作されることがほとんどである。普通の植木鉢でも、オーダーでは同じデザインの品を100個というように多量に注文されることが多いので、定期的ではないにしろ、陶工にとっては重要な取引となっている。

第三に、スキと呼ばれる陶器販売店との取引関係がある。フィリピンでは、スキは一般的に固定した買手と売手の関係を指す名称であるが、バリ村の陶工の間では、製品を定期的に卸している相手の小売店をスキと呼んでいる。運送費を陶工が負担しなければならないが、取引は確定するので、スキ販売店との取引を行っている者が7人いる。しかし、スキ関係に付随することが多いといわれる儀礼親族関係や保護—奉仕関係などの社会的側面はここには見られない。⁵⁾

売手と買手の特別な関係という点では、スキ販売店よりも、コンブラと呼ばれる仲買人との

取引の方が特徴的である。陶工と仲買人は原則的に相対であり、1人の陶工が複数の仲買人と取引したり、あるいは逆に1人の仲買人が多数の陶工の製品を買い占めるということも行われない。⁶⁾ 仲買人は1名を除き全員が他村出身で、その市場圏は州都周辺から州北部、さらに北の州境を越えて隣州にまで広がっている。バリ村の陶工の内、仲買人との取引を行っているのは26人であるが、運搬の費用や労力が要らないので、卸価格が小売価格より3～10ペソ低くても仲買人の取引の方が良いという。

いずれの場合においても、製品取引によって特定の取引相手に干渉されることなく、陶工は品目や生産数に関して自分の判断において製造を行っている。オーダーやスキ販売店による量産の注文を受ける場合でも、同世帯内の親子・夫婦を除き、複数の陶工による共同生産は行われず、個々の陶工が自分の能力を判断して注文を受ける。品目や量、納期について買手との間で合意しない場合は、別の陶工に注文を譲ることになる。バリ村の土器産業の担い手たちは、自分で生産し、自分でその製品を捌くというやり方採っているのである。

4. 陶工

シーンズは、バリ村の陶工は1人を除き全員が女性であることを述べているが、現在でも土器産業の担い手は女性が主体であり、陶工36人の内男性は4人にすぎない（表2参照）。その男性の内、2人は農業労働や家畜飼育の仕事が暇なときに妻の土器製造を手伝うという程度である。また、既婚者が圧倒的に多いのも特徴的で、未婚者は3人、この中でも20歳代の未婚女性は1人だけである。陶工の配偶者は小作農や農業労働者など、その半数以上が小農民である。つまり、バリ村の陶工の平均像は「低収入農業世帯における主婦」ということができる。

陶工自身の言葉によれば、土器製造の技術は「経験」や「練習」によって習得される。陶工の大半はバリ村に生まれ、上の世代の女性たち、特に母親が土器を作っているのを見ながら育っている。その多くは、手を取って教えてもらったことはないが、見よう見まねで製造を始め、「練習」を経て現在に至っているという。他村出身者では、バリ村に移住して初めて土器作りに触れ、友人や隣人、あるいは夫の母に教わったというケースもある。バリ村の土器製造では、技術習得とともに事業開始も個々人の意志に任されている。誰でも好きな時に、自分で木を削って轆轤と叩き板を作り、身近な陶工から磨石を分けてもらって、土器作りを始めることができ

5) スキ関係に関しては、Szanton [1972] や Davis [1973] の研究がある。どちらの研究も、売手と買手関係の固定化が零細商人の生存戦略として評価されている。しかし、筆者の調査では、アンティーケ州におけるスキ関係は、純粋に経済的なものである [永井 1992]。

6) サントンおよびデイヴィスによれば、フィリピンの地方市場には、売手と買手の関係がはりめぐらされており、その関係は基本的に相対で「相手を出し抜かない」という道徳的側面が見られる [Davis 1973; Szanton 1972]。陶工と仲買人の関係も、そのような地方市場の伝統的規範に合致したものと考えられるが、こうした関係の維持に重要な役割を持っているとされる掛売りや前金の慣行は、ここには見られない。

表2 バリ村の陶工

世帯 番号	性別	年齢	出身地	土器製 造を始 めた年 齢	生産個数 (1週間 につき)	土器製造 からの週 収入(概 算、ペソ)	配偶者の職業、または その他の収入源	
1	女	81	バリ	12	150	1,900	なし(未婚)	
2	女	72	バリ	20	24	700	夫と死別、息子の仕送り	
3	女	70	バリ	15	125	1,700	自作農	夫が村長
4	女	70	バリ	15	150	1,500	農業労働者及び漁師	
5	女	66	バリ	63	40	600	農業労働者	
6	女	63	バリ	15	150	1,900	自作農及び子供の仕送り	
7	男	62	ネグロス西州	22	1,000	11,800	土器商、アイスクリー ム商などを兼業	元組合長 父娘共同製造
8	女	60	バリ	10	100	2,200	小作農	
9	女	60	バリ	30	100	1,000	小作農	
10	女	53	バリ	23	100	1,900	農業労働者	夫が村会議員
11	女	52	バリ	35	500	4,800	家畜委託飼育及び農業 労働	夫婦共同製造
	男	60	ネグロス西州	58				
12	女	52	バリ	25	150	2,200	自作農及び農業労働者	夫が村会議員
13	女	51	州内・他村	36	200	3,200	小学校教師及び乗合オ ートバイ運転手	母娘共同製造
	女	27	バリ	24				
14	女	50	バリ	20	225	3,500	建設労働者	
15	女	48	バリ	16	75	750	農業労働者	
16	女	44	バリ	11	90	1,500	農業労働者	
17	女	43	州内・他村	23	70	1,000	建設労働者	
18	女	43	バリ	16	50	220	借地農	
19	女	41	バリ	31	15	120	農業及び建設労働者	
20	女	41	州内・他村	20	80	1,500	建設労働者	
21	女	40	バリ	22	150	2,300	農業及び建設労働者	
22	女	37	バリ	18	100	1,500	小作農	夫婦共同製造
	男	40	州内・他村	36				
23	女	36	バリ	19	400	2,500	乗合オートバイ運転手	No. 11 の娘
24	女	36	バリ	22	65	900	農業及び建設労働者	
25	男	32	バリ	15	100	1,900	自作農(未婚)	初代組合長
26	女	31	バリ	21	60	1,100	農業労働者	
27	女	31	バリ	19	30	200	農業労働者及び漁師	
28	女	30	バリ	27	50	600	農業労働者	No. 5 の娘
29	女	27	ネグロス西州	24	400	4,000	借地農	
30	女	26	バリ	25	120	800	農業労働者	No. 16 の娘
31	女	25	バリ	20	130	2,100	なし(未婚)	
32	女	(調査に応じず、40代?)						

出所：1999年6月の調査による。

るという。しかし、男性や他村出身者の参入を阻む文化的タブーは存在しないとはいえ、歴史的にはバリ村出身の女性が中心で生産は行われてきた。

その一方、陶工たちの間で、積極的に後継者を育成してゆくという動きも見られない。陶工

の娘であっても、若く未婚の内は土器製造に関与せず、農業労働者あるいは日雇い土木労働者などを夫とし、収入に不足があるという状況になって、初めて土器製造に目を向ける場合がほとんどである。これは、土器作りが「低収入農業世帯の主婦の仕事」と位置づけられていることに関連している。未婚の娘たちは、国内および国外への出稼ぎや自身の結婚を含めて目を外に向けており、「貧困世帯」の「主婦」が行うという土器作りを、将来性のない、外聞の良くない仕事と受け取っている。一方、息子たちの中には製造で力仕事となる工程を手伝う者もいるが、それよりも学校を卒業してより有利な就職をすることが期待されている。

次に挙げる陶工たちの例には、土器製造が彼女たちにどのように評価され、生活に位置付けられているのかが垣間見られる。

①バリ村生まれでネグロス西州出身の男性と結婚、8人の子供を持つ52歳（表2のNo. 11 陶工）。夫の収入源は農業労働およびサゴッドと呼ばれる家畜の契約飼育である。⁷⁾ 未婚の時は首都圏に家事労働者として働きに行っていたが、結婚して村に帰り、長子が家事を手伝えるようになって、35歳で土器製造を始めた。現在、週500個の製品を製造し、仲買人との取引の他に、毎週100個を州都のスキ販売店に卸している。夫も近年趣味として土器作りを始め、彼がデザインしたブンサイ鉢は特別注文を受けるほどになった。乗合オートバイ運転手の夫を持って別世帯になる36歳の娘（No. 24）も、第1子が生まれた後に思い立って土器作りを始めた。その後、一時期首都区域に出稼ぎに行っていたが、現在は土器製造に集中し、出稼ぎにはもう二度と行くつもりはないという。

②シバロム川対岸の村から婚入し、15年前から土器作りに携わっている51歳（No. 13）。陶工の間では例外的に夫が小学校教師という定収入のある世帯であり、なお副収入源として週末に乗合オートバイを運転している。この三つの収入によって、コンクリート作りの家屋を建て、8人の子供を大学に入れることができた。そのため、彼女は土器作りを誇りに思っており、現在は子供も大きくなって家計に不足はないが、土器製造を止めるつもりはまったくないという。今は娘の1人が手伝っている。

③バリ村出身の44歳（No. 16）。小学校4年生の時に母親から土器作りを習った。その後、首都区域へ家事労働者として出稼ぎに行き、そこで他州出身の男性と知り合い結婚した。結婚後、すぐにバリ村へ帰郷したのは、どこに住むにしても、土地なし農民の出稼者であった夫の仕事は農業労働か土木建設労働に限られているが、バリ村であれば彼女は土器作りで稼ぐことができるからである。そこで、2人はバリ村に土器作りに便利な広い土間のある家を建てて生活を始め、10人の子供を育てた。26歳の長女（No. 30）は、アンティーケ工芸大学の中等課程を修了

7) レデスマによれば、イロイロ州においては除草作業の報酬として農業労働者にその田の収穫権を与えることをサゴッドと呼んでいる [Ledesma 1982]。アンティーケ州では、牛、豚、水牛などを所有者に代わって飼育し、その見返りにその子供を1頭譲り受けるという慣行となっている。これによって、経済的余裕のない農家も市場購入に頼らず家畜を獲得することができる。

後、やはり首都区域への出稼ぎ、結婚を契機に帰村という同じ経路をたどり、数カ月前に土器作りを始めたばかりである。

④アンティーケ工芸大学の陶芸課程を卒業した唯一の陶工、25歳 (No. 31)。バリ村に生まれ、ごく幼い頃から陶器作りに親しみ、工芸大学では特に選んで陶芸を専攻した。在学中は日本への留学の話もあったが、結局、留学も陶器会社への就職も実現せず、20歳の時から村で土器作りを始めた。現在は、他の陶工たちと同じ技法で、焔炉や植木鉢など1日に20～30個の器を製造している。彼女の意見では、こうした伝統的技法による従来の品目は実用的でよく売れ、学校で習った別の技法や新しい品目を試みる余地はないという。しかし、より良い雇用機会があれば、陶工として職人の道を追及することよりも、新しい職業に移ることも考えられるという。

こうしたプロフィールの中から、陶工の二つの矛盾した顔が浮かび上がってくる。一つは、農業労働者や家事労働者と同じ社会の底辺を占める層に属することに甘んじる顔であり、もう一つは、それなりの経済力を持つ独立した生産者としての顔である。陶工は、経費を引いても週に平均1,500ペソ程度の所得があり、このペースで1年中働くとすれば年収は72,000ペソ、アンティーケ州平均以上の収入を得られることになる。⁸⁾ これは、州内における衣食住の基本的ニーズを満たし、さらに子供の教育費を捻出することができる額といえる。これについて、陶工たちは「子供は焔炉や土鍋のおかげで学校に行っている」と表現している。経済面に加え、創作の楽しさを語ったのは上記②の例だけではなく、バリ村の大半の陶工がアルチザンとしての充足感を土器作りに感じている。

その一方、若い頃は家事労働者として出稼ぎに行き、小農民や日雇い労働者と結婚した後に土器製造に従事するという陶工の平均像は、そのまま土器製造が底辺層に属する職業であると考えられていることにつながっている。ここで問題になるのは、所得で計られる生活水準の高低ではなく、職業の種類などで示される社会的クラスであり、バリ村でも土器製造に従事していない世帯で聞かれた「自分の家族は土器作りをするほど落ちぶれてはいない」「あのうちは小学校の教師なのに土器作りなどやっている」という土器製造に対する否定的なコメントは、その社会的劣位を示唆している。

8) 陶工の週当り収入は、生産数、品目、小売・卸売の別を考慮して概算したものである。ただし、乾期の生産数を基準にしているので、雨期には乾燥用のスペースに応じて減少し、中には半分以下になるケースもある。アンティーケ州の平均年収は1991年で36,183ペソ [Philippines, NSO 1996] で、それ以後の統計資料は公表されていない。アンティーケ州の所属する第6広域行政区域における平均年収は、1991年から1997年までに1.8倍となっている [Philippines, NSCB 1998]。これをアンティーケ州に当てはめれば、平均年収は1997年で65,129ペソ相当である。

III 土器産業と開発援助

1. 1950年代から1970年代まで

フィリピンには全国や地方ごとに陶器の有名産地があるが、それに比べるとバリ村の土器産業は知名度においても市場圏においても下位で、基本的にはアンティーケ1州だけを対象にした産業といえる。バリ村の土器製造がいつ頃から始まったかは知るよしもないが、この農村産業が振興計画に関連して歴史の表面に出てくるのは1950年代である。現在、バリ村域に一角を占めるアンティーケ工芸大学は、中等および中等後教育課程を持つアンティーケ商芸学校として1954年に創立された。創立にあたり、学校の職業訓練に対する要望について調査が行われ、それによると電気製品組立修理、洋裁、食品加工などを凌ぎ、陶芸がもっとも要望の高い科目であった。学校の陶芸科は、陶芸に関する知識と技術を普及し、州の陶器産業を振興することを主旨として開設されたのである。1965年、商芸学校は窯を新設し、日本から陶芸専門家も到着した。この窯建設は日本の援助によるものと一般にいわれているが、日本政府の対比援助開始は1969年であるところからみて、建設資金はそれ以前の、マカパガル政権下で各方面に分配された戦時賠償金の一部ではなかったかと考えられる。

陶芸科および窯の設立は、二つの面でバリ村の土器産業に直接関係を持つはずであった。バリ村陶工の子供に対して総合的な陶芸教育を受ける機会を設けたことと、村の陶工に窯の利用を奨励したことである。1969年のシーンズの調査によれば、バリ村の子供たちの中には陶芸科で学ぶ者もあり、また村の陶工が見学にくることもあった [Scheans 1977: 35]。しかし、窯利用については経費利用者負担となっていたため、村の陶工で窯を試してみようという者はなかった。その後1970年代には、バリ村の土器産業に働きかける具体的な計画は、人々の記憶にも学校やシバロム町役場の記録にも残っていない。

2. 1980年代から1990年代まで

全国レベルでの陶器産業は1980年代に転換期を迎えていた。フィリピン通商産業省（以下、通産省）が陶器を輸出奨励品目としたのに応えて、1984年に陶器製造輸出業者協会が設立され、1986年には、フィリピン陶器産業全体がヨーロッパ共同体の助成による技術援助計画の対象となった [Philippines, DTI 1995]。バリ村の土器産業もこの動きに無関係ではなかった。1984年、バリ土器製造者組合が通産省主導で正式に発足した。発足の際、村民70人が各人250ペソを出資したという。この年および翌年、通産省の奨励金を得るために開発計画書の提出が課せられ、新製品開発を課題とした計画書が作成されたが、計画が実行されることはなかった。一方、組合は別の面で陶工たちに大きな影響を及ぼした。まず、価格規定と品質管理が行われた。しかし、組合の規定した価格は陶工たちには低すぎると感じられ、また、ひびの入った製品は元より、修

繕した品も不合格とする管理に対して不満の声が上がった。次に、組合は組合員に対して短期貸付けを行った。当初、これは非常に歓迎されたが、次第に返ってこない貸付金が積み重なり、資本金を食いつぶしていった。

1988年、村落ベースの開発計画の実行を主眼として、アンティーケ統合地域開発基金(ANIAD)がフィリピンおよびオランダ両政府からの援助によって創設された。ANIADは州政府や政府諸機関、そして州内で活動しているNGOなど、様々な関係組織からの代表者で構成された組織であり、現在も州政府と密接な連絡を取りながら開発計画を実施している。ANIADの正式発足の前年にあたる1987年、バリ土器製造者組合は組合員数38人を数え、オランダ政府開発援助を受けることになった。この開発計画は、村内に藁を燃料とする窯を3基建設し、土器産業の開発を促進するというものであった。ところが、窯設置のための場所が選ばれ測量が行われて、オランダ大使が視察に来た後、計画は立ち消えになった。その理由は現在でも明らかではなく、援助金使い込みの噂だけが残っている。誰がどのように使い込んだのか、援助金の管理責任は誰にあったのか追及されることもなかった。この開発計画失敗を契機として、バリ土器製造者組合は事実上解体した。

一方、アンティーケ商芸学校は、1984年に高等教育課程を持つアンティーケ州立工芸大学に昇格する。州民のニーズの変化を背景として、名前だけではなく学校の方針も職業訓練から学術教育へと推移し、この前後から陶芸を専攻する学生は減少する一方となった。それに伴って陶芸科の予算も制限され、燃料のコスト高を理由にガソリン窯が使用中止となり、薪窯さえ燃料の調達が難しい状態となった。日本の国際協力事業団(JICA)のプログラムを通じて、講師3人が陶器産業研修のために愛知県へ送られていったが、陶芸科の先細りに歯止めをかけることはできなかったのである。

1989年、通産省は全国的な陶器および煉瓦生産開発計画を構想し、それを受けて各地で事前調査が行われた。アンティーケ州では、ANIADによってアンティーケ陶器工房設立計画が提出された。これは陶器製造販売を目的とする事業組織を設立し、工房と販売店を持つプラントをバリ村の隣クバイ・ナプルタン村に建設しようというものである。計画では、商品開発や市場戦略の点で、工房がショーケースの役割を果たすことも目的とされていた。この計画は直接バリ村を対象とはしていないが、バリ村の土、熟練労働力、加えて工芸大学の技術的援助に依存していることは明らかである。計画場所としてバリ村ではなくその隣村が選ばれたのは、この村が東西南北要路の交差点にあたり、州都からも近距離であるという立地条件のためであった。

この計画には、煉瓦生産という重要な提案が含まれていた。工芸大学の専門家たちは、1960年代から煉瓦生産に期待をかけてその導入に努めていた。煉瓦は熟練技術がなくても量産が可能であり、また土木建設材料として様々な用途が見込まれる。バリ村の陶工も、注文に応じて煉瓦を製造することはあったが、煉瓦で土器産業の興隆を見るには、大量生産と市場拡大を実

行できる事業組織が必要であった。工房設立計画は、州内の陶器産業の将来を託すものとして煉瓦生産を提案していたのである。しかし、事前調査結果は、煉瓦生産に対して否定的であった。現在、州内では伝統的陶器品目に関して需要が供給を大幅に上回り、将来も成長が見込まれるのに対し、煉瓦の市場は皆無であり、今後も可能性があるとはいえないというのがその結論であった [ANIAD 1990: 184]。

アンティーケ工房設立計画が却下された後、バリ村土器産業に対する開発計画では、バリ村陶工を対象とする1週間の研修が最後のものとなった。この研修は通産省と工芸大学の協力によって計画され、陶工の大半が参加した。しかし、結果としては、陶工たちは研修の内容に積極的な興味を示さず、バリ村の土器産業には何の変化をももたらさなかった。この研修以後、通産省はその援助対象をバリ村から州中部のティビヤオ町に移した。

一方、1997年、工芸大学では、専攻学生が皆無となったことを理由に陶芸科は閉講となった。その43年の歴史で、卒業生を陶器会社に2名、バリ村の土器産業に1名送り出したことが主たる成果として残った。

IV アンティーケ農村社会におけるバリ村土器産業

1. 「妻の仕事」としての土器産業

アンティーケ州では、19世紀にはすでに生産性の低い農地は増加する人口を支えきれず、人口流出の傾向が顕著であった [Fornier 1995: 175]。1960年代からは農業開拓地への移住も盛んであったが、都市化に伴って、首都区域へ向かう女性家事労働者が最も大きな出稼ぎ者の流れを形成するようになった。一方、「緑の革命」にやや遅れて1970年代にこの地域を席捲した稲作技術革新は、直蒔栽培法と除草剤の使用をもたらし、伝統的な労働交換慣行がくずれて農業労働への依存を高めることとなった。田植と除草作業の省略、加えて政府政策による脱穀機と精米機の普及は、まず、自小作農家においてそれらの作業の担い手であった女性労働力を、稲作農業から締め出す方向へと働いた。農業労働者の仕事は耕起および刈取り作業に集中したが、耕起作業では女性労働者が雇用されないようになり、⁹⁾ さらに近年になって使用され始めた耕耘機の人気は、全般的な労働力の削減を招いている。¹⁰⁾ 未婚者には出稼ぎに行くという選択肢がある

9) アンティーケ州の一部では、現在も耕起作業に女性農業労働者を雇用しているところがあるが、賃金は男性労働者の3分の2ほどの格差がある。しかし、平地部農村の多くでは、女性農業労働者は作業量や速度が男性労働者より劣る、あるいは耕起作業はそもそも女性の仕事ではないとされている。

10) 農業労働者が1ヘクタール以下の耕地を耕す場合、作業は原則的に1人で行われ、賃金は50~100ペソ、水牛が農業労働者の持ち込みである場合は150ペソ、それに食事および作業後の酒がつくのが普通である。一方、地主や比較的富裕な自作農の間で、近年、耕耘機を購入・使用する者が出てきており、これによって耕起と刈取りという農業労働者の二大雇用機会のうちの一つが縮小するようになった。特に、平地耕地が集中するシバロム町では、この変化の影響は大きい。耕耘機を購入する余裕のない自

が、アンティーケ州では、既婚者が家族をおいて出稼ぎに行くことはしないというのが一般的な状況であるから、農民の妻たちは村にとどまって余剰労働力となる傾向にあった。

人口の約半数が最低賃金以下の収入で生活するアンティーケ州の農村では、まず食べることで、つまり米の獲得に優先権があり、それ以外の不足に対しては、借金や出稼ぎ者からの仕送り、あるいは人々がよく口にする「無しで済ます」ことでやっていくのが生活態度となっている。自作農は、0.5ヘクタール以上の水田があれば、年間の自家消費に必要な米を生産し、さらに現金収入の必要な折りには米を販売して家計の収支を合わせていくことができるという。農業労働では、現金収入源となる耕起作業では1期につき雇用があるのが7日程度で、収入として極めて少額であるといえよう。一方、収穫作業では収穫量の14～17%を労働者の頭数で等分した現物支給である。¹¹⁾ 労働日数や世帯当りの労働者数によるが、条件さえ良ければ、収穫作業で農業労働者の家族が1年間に消費する量の米を得ることも不可能ではない。¹²⁾

バリ村は、世帯の大半が狭小な土地を耕す自作農または小作農か、あるいは農業労働者である。村内にこそ平地の稲作耕地は少ないが、州随一の水田地帯の中に位置しているため農業雇用機会は比較的多い。こうした状況において、農業からの米と土器作りからの現金収入は、世帯運営の基本的ニーズに対して相互に補完し合い、夫と妻の分業を決定してきたと考えられる。現在、土器製造を行う32世帯の内、14世帯が農業労働、8世帯が自作・小作による農業を世帯主の収入源としており、土器製造を主収入源としているのは、配偶者のいない女性陶工の3世帯と夫自身が陶工である1世帯だけである。近年、耕耘機の普及に従って農業労働雇用機会が減少し、農業労働者が建設労働者に転換していく傾向がある中で、土器作りからの収入は夫の収入を上回っている。¹³⁾ 「食」を満たした後は、現金収入の残りは「衣」「住」そして子供の教育に投資され、その費用の大部分は土器作りから来るものであるが、土器製造はやはり世帯の主収入源ではなく、夫・妻の分業に従って「妻の仕事」という位置づけにある。¹⁴⁾

↘ 小作農も、耕耘機の導入には無関心ではなく、耕地当り350～500ペソ（操作者込みの賃貸料）を払っても耕耘機を使ってみたいという農家が多い。カーフリートは、中部ルソンにおける稲作農村の事例で、技術革新とセットになった稲作農業の資本化に伴って、小作農であった者たちが農業労働者に転落し、余剰労働力となった過程を描いている中で、農業労働者の数少ない仕事の中に耕耘機の操作を挙げている [Kerkvliet 1991: 55]。しかし、アンティーケ州では、耕耘機の操作のために農業労働者が雇用されることはなく、普通は小作農か自作農が操作している。一方、農業労働者の間では、生き残りのために、借金をしてでも自ら耕耘機を購入し、雇用を獲得しようとする人が出てきている。

11) この支払方法はボルシェントと呼ばれる。労働者たちは、脱穀した粳米を袋に詰めていく作業で、7～8袋ごとに1袋を自分たちの報酬として取り分けていく。

12) 例えば、1日に粳米5ガンタ（約12.5 kg）の取り前で、1収穫期に20日働けば年間750 kgの収入となる。ただし、これは条件の非常に良い場合で、3期目は通常収量が落ち1日の取り前が5 kgということもある。

13) 州相場では、1999年現在で精米1サック（50 kg）が800ペソ。1世帯分1,000 kgの米を購入するには16,000ペソが必要で、収穫からの夫の所得はこの金額相当と概算できる。賃金雇用機会は少なく、耕起作業以外ではごくたまに除草作業があり、建設関係では家屋新築、井戸掘り、洪水で流された橋の再建などの日雇いに限られている。

14) ルッテンによると、ア克蘭州における帽子作りおよび莫塵作りの農村産業でも、生産は文化的に「女」 ↗

このようなバリ村土器産業は、他地域の土器産業における生産形態と比べて特徴的である。例えば、ネグロス東州ギンヒラン村では、陶工の性別によって品目の専門化が見られるが、陶工が既婚女性中心ということはない。マリピピ島では、夫は土捏ね作業、妻は成形を担当して共同で製造を行う。ブラカン州ガップカ村では、少年は焔炉、少女は土鍋作りを習い、男女、未・既婚の区別なく土器作りの伝統を受け継いでいる。これ以外の産地においても、伝統的土器産業では、男女ともに生産に携わっているケースが大半である [Scheans 1977; Zayas 1996; Zayas *et al.* 1998 など]。バリ村の分業は、米の確保が最優先する世帯運営と、またそれが可能な稲作中心の農村という環境に関連していると考えられる。

2. 開発計画の失敗

バリ村の土器産業に関係した開発計画は、却下された陶器工房計画を除き、①アンティーケ商芸学校の陶芸科開設および薪窯建設、②通産省によるバリ村土器製造者組合の設立、③オランダ政府援助によるバリ村藁窯建設、④バリ村陶工を対象とした研修の4つであった。ここには技術導入、融資、品質管理、人材開発のすべての要素が揃っていたにもかかわらず、成果を上げることができなかった。技術面では、通産省や工芸大学が導入しようとした薪窯、型作り、蹴轆轤などのほとんどが、一言でいえば、バリ村の伝統技法とはあまりにも異なり、採用できるものではなかったのである。唯一、バリ粘土に適した低温調節のできる藁窯だけが利用の可能性を持っていたが、前述の通り、これは実現せずに終わった。¹⁵⁾

組合を通して融資も行われたが、借り出された金銭は、土器製造の改善には使われずに、各世帯で家計費の補充として、なしくずしに消費されてしまった。もともと、バリ村の陶工には生産コストという考え方はなく、原料、道具および労働力が現金払いなしで手に入るところか

↘ 性の仕事」と考えられている。その理由として、生産の場が個人家屋内であるため、他の家事労働と平行して行うことができること、比較的軽い作業なので女性に向くと考えられていること、そして、以前は女性が従事していた織物業が消滅し、その代わりとして帽子・莫座作りが始まったという歴史的経緯を挙げている。夫たちが積極的に参入せず、農業や他の仕事に従事している状況には、バリ村の土器産業との共通点が見られる。両者の相違点は、このア克蘭州の農村工業が、現在、輸出向け生産を行っており、夫たちは、実際には、かなりの頻度で妻の仕事を「手伝う」という形をとっている。[Rutten 1993: 76-81]。しかし、ルッテンも指摘するように、夫の参加が単なる「手伝い」と位置づけられていることに文化的意味合いがあるといえる。

15) 蹴轆轤では成形がすべて回転する轆轤の上で行われ、その速度に見合う技術の習熟が不可欠となる。型作りでは、まず石膏で型を作り、陶土を延べて板状にして型に入れるか、あるいは陶土を液状にして型に流し込む。どちらも量産および生産品の画一性という点では、叩き作りより優れた技法であるが、バリ村の陶工にとっては、新技術の習得にかかる時間および必要な道具・材料の購入という問題があった。また、フィリピンの素焼陶器に使われる赤土は、通常、摂氏1,190度で熔解するといわれるが、バリ粘土は約800度という低い温度で焼成し1,000度を越すと熔解する。ガソリンや薪を燃料とする窯では温度が高くなりすぎるため、工芸大学では当初予定したようにバリ粘土を使用することができず、他地域から陶土を購入して実習に当てていた。オランダ政府援助によるバリ村窯建設計画では、この経験に基づいてより低温に調節できる藁窯が計画された。新しい通産省の指導地域ティピヤオ町でも、藁窯建設が第一に行われた。

ら、売上げの中から燃料購入などの必要経費を取り分けておくことさえも行われていない。従って、組合の融資が土器生産に投資され、その利益の一部が利子として組合に返されるべきものであることは、ほとんど理解されなかったのである。また、組合が設定した品質基準は陶工自身の基準と一致せず、それ以上に、不良品をはねて製品数を減らすことは、量産・多売のできないバリ村の陶工には存亡問題であった。

人材開発という点では、前述の陶工④の工芸大学の陶芸科を卒業した陶工の存在が象徴的である。大学で陶芸の総合的な知識を身につけながら、現在は伝統的方法で生産を行っている。彼女によれば、伝統的製品は州住民の生活と経済水準に合ってよく売れ、学校を離れてみれば勉強した他の技法を試みる余地はないという。

一方、他州出身で元組合長の男性陶工は、新製品を開発したり、自ら仲買人となって販路を拡大している唯一の陶工である。娘と共同製造を行っていることを考慮に入れても、その収入は群を抜いて高いが、他の陶工が夫の収入と合わせて世帯運営を行っているのに対し、彼の場合は土器作りから年間の米代も生み出さなければならない状況にあるので、陶工の間では特に成功者と評価されているわけではない。また、彼のやり方でも土器生産の拡張は頭打ちであり、そのため行商や他の雑多な仕事をしてなければならないのが現状といい、このことは、個人をベースとした伝統的産業構造の限界を示唆している。

3. バリ村土器産業における革新

では、バリ村の陶工たちが、通産省の努力や陶芸科の閉講を横目で見ながら、伝統的生産方法に固執するばかりであったかという点、そうではなく、地域社会の市場ニーズに応えながら変化している面があることを指摘できる。

アンティーケ州の農村部では、薪を無料で採取することができるために、購入を必要とする木炭は燃料として一般的ではない。ところが、バリ村土器産業においては、近年、薪焔炉ではなく、木炭焔炉がもっとも需要の高い製品と見なされており、この製品が都市部世帯層、つまり日常の調理に燃料を購入する世帯層の増加と密接な関係にあることがわかる。バリ村の木炭焔炉に特有のシレンという名称は、プロパンガスの商品名から来ており、火力の強さだけでなく、都市消費文化のニュアンスを伝えるものとなっている。

また、植木鉢は、他の産地においても実用の焔炉や土鍋からの転換を示す製品となっているが、バリ村のブンサイ鉢はより一層興味深い品目である。「盆栽」は近年になって都市部知識層から始まった一種の流行であり、ブンサイ鉢は品目として新しいと同時に、叩きと轆轤を使用しない、バリ村の技法では革新的な器ということが出来る。ブンサイ鉢は伝統的品目に比べて完成度は低い、独自の創造性を発揮する余地を持ち、熟練陶工たちだけでなく、その夫や娘、息子など、それまで土器作りには関与しなかった人たちを魅きつける役割も果たしている。

工芸大学の研修は不評に終わったが、その中で、彩色した置物には陶工の大半が興味を示した。型で作った人や動物の像に様々な色を施した置物は、バリ村の土器とはかけ離れたものであったが、陶工たちは即座に「これはいい」「これは売れる」と思ったという。その後、商品にはなっていないが、手びねりで置物制作を試みたり、水瓶に色模様を描いたりしている人もいる。このように、バリ村の土器産業は、伝統保守だけではなく、製品の特性や市場傾向をすくなく嗅ぎ取り、品目だけでなく技法までも変えていく可能性を秘めている。そして、その変化の方向は、個々の陶工の判断によって選択されているのである。

お わ り に

バリ村の土器産業は、その置かれた農村社会において稲作農業と表裏一体の産業構造を有してきた。その社会経済的コンテクストを離れて土器産業の発展だけを目的とした試みは、当然のことながら成功しなかったのである。陶工たちは独立した生産者であり、地域社会の変化に柔軟に対応しながら、その結果として革新を生んできた。そして、その革新性が土器産業自体を持続させてきたといえる。

一方、将来、土器産業を変容させるより本質的な要因は、陶工の世帯の中にあるといえよう。土器製造は経済的余裕をもたらし、その子供たちは中等教育以上の教育を修了して様々な職業を選択するようになっていく。これは、陶工たちの大多数が初等から中等程度の教育を受けるにとどまり、職業が限定されていたことと大きな相違である。この後継者である次世代が土器産業をどのように認識し、どのようにそのライフサイクルの中に位置づけるかによって、バリ村の土器産業の将来は変わってくるといえる。また、地域社会の全体的な経済水準の向上も、土器産業のあり方に影響せずにはいない。しかし、その変化は決して急激ではないはずである。アンティーク州が経済発展を遂げ雇用機会が増える兆しは見えていないし、学校教育を終えた若者でも零細農業と日雇い労働に戻ってくる者が少なくないからである。バリ村では、零細農民、農業労働者、土木建設労働者といった低収入層が村内に存在する限り、その妻たちが土器産業を存続させていくと考えられる。

謝 辞

バリ村の調査は、日比交流史フォーラムの研究助成を得て行われた。ここに謝意を表したい。

参 考 文 献

- Antique Integrated Area Development (ANIAD). 1990. Feasibility Study on Pottery and Brickmaking. Unpublished. 184p.
- Davis, William. 1973. *Social Relations in a Philippine Market: Self Interest and Subjectivity*. Berkeley: University of California Press.
- Fornier, Joselito. 1995. *Antique in the Nineteenth Century: Colonial Politics, Society and Economy in a Philippine Province*. Ph. D. Dissertation, Northern Illinois University.
- Kerkvliet, Benedict J. Tria. 1991. *Everyday Politics in the Philippines: Class and Status Relations in a Central Luzon Village*. Quezon City: New Day Publishers.
- Ledesma, Antonio J. 1982. *Landless Workers and Rice Farmers: Peasant Subclasses under Agrarian Reform in Two Philippine Villages*. Los Banos: International Rice Research Institute.
- 永井博子. 1992. 「フィリピン, アンティーク州の市場」『史苑』53(1): 95-104.
- . 1997. 「フィリピン農村における国内出稼ぎ労働者の実態——アンティーク州シンボラ村の事例」『史苑』58(1): 26-55.
- Philippines, Department of Trade and Industry (DTI). 1995. *Decorative Ceramics: Industry Sector Profile*. Manila: Department of Trade and Industry. 28p.
- Philippines, National Census and Statistics Office/National Economic and Development Authority (NCSO/NEDA). 1990. *1990 Census of Population and Housing: Antique*. Manila: National Census and Statistics Office/National Economic and Development Authority.
- Philippines, National Statistic Coordination Board (NSCB). 1998. *1998 Philippine Statistical Yearbook*. Manila: National Statistic Coordination Board.
- Philippines, National Statistics Office (NSO). 1996. *Provincial Profile: Antique*. Manila: National Statistics Office.
- Rutten, Rosanne. 1993. *Artisan and Entrepreneurs in the Philippines*. Quezon City: New Day Publishers.
- Scheans, Daniel J. 1977. *Filipino Market Potteries*. Manila: National Museum of the Philippines.
- Szanton, Maria Cristina Blanc. 1972. *A Right to Survive: Subsistence Marketing in a Lowland Philippine Town*. University Park: Pennsylvania State University Press.
- Zayaz, Cynthia Neri. 1996. Pottery-making in Maripipi. In *Binisaya nga Kinabuhì, Visayan Life: Visayas Maritime Anthropological Studies II, 1993-1995*, edited by Iwao Ushijima and Cynthia Neri Zayas, pp. 111-127. Manila: CSSP Publications, University of the Philippines Press.
- Zayas, Cynthia Neri; Verdolaga, Eloisa; Beyer, Gayia; Contreras, Karlota I.; Reyes, Celeste; and Iniego, Jr. Florentino. 1998. Ilokanong Agdamdamili: Buhay, Pananaq at Kultura sa Vigan. *ipeg* 4 & 5: 1-32.